



お茶を飲みながら開かれるがん哲学外来。患者(左)の話に、樋野興夫・順天堂大教授がじっくりと耳を傾ける—東京都東久留米市で

がんを生ききる

「がん哲学外来」の取り組みが広がっている。がん患者の悩みや思いを受け止める試みとして、昨年1月に順天堂医院(東京都文京区)でスタート。現在は東京都東久留米市など全国4カ所で定期的に開かれ、各地でも開催の動きが出ている。今年2月にはNPO法人が設立された。外来はいずれも予約で埋まり、患者や家族の関心は高い。患者の心に寄り添う「がん哲学外来」の取り組みを紹介する。【永山悦子、写真も】

「哲学外来」で心ケア

患者、家族の悩み 医師ら耳傾け

「病院の医師は、質問に答えてくれる。ただ、この治療がいつまで続くのか、それを考えるにつらくて……」

昨年末、東久留米市で開かれた「がん哲学外来」を訪れた卵巣がんを治療中の40代女性、ピンク色のハンカチで涙をぬぐった。07年秋に手術したものの、リンパ節への転

高い関心 各地で次々開催

移が見つかり、抗がん剤治療を続けた。検査数値は改善せず、足のむくみもひどい。保育士の仕事も休職中。「治療しながら仕事をしている人もいるのに、甘えていいのか」と自分を責めた。そんなとき、がん哲学外来を知り、すぐに申し込んだ。

静かに女性の話に耳を傾けていた、外来の発案者である

樋野興夫・順天堂大教授(病理・腫瘍学)が「今は自分のことだけ気にすればいい。人生いばらの道にもかかわらず宴会」という。健康であったも、つらいことはある。どんな回り道にも意味がある」と語りかけると、女性の表情がやわらいだ。

樋野教授は、病理学者として長く遺体と向き合う日々を送るうちに、「人は必ず死ぬもの」との思いを強く持つようになった。病氣と共存しながら、いかに充足した人生を過すか。07年のがん対策基本法施行による社会のがんへの関心の高まりもあり、「がん患者や家族と向き合いたい」と考えるようになった。当初、「閑古鳥が鳴くのでは」と思われていた順天堂医院での試みには、申し込みが

殺到した。さらに、有志が地域での外来開設に名乗りを上げた。現在の外来は主に樋野教授が担当する。治療行為はせず、約1時間かけて患者と家族の話や聞き、患者らは「こんなに医師とじっくり話してきたのは初めて」と充足感を抱いて帰路につく。

外来の取り組みを全国に広げようと、今年2月にはNP

の法人「がん哲学外来」が設立された。今月9日、設立記念シンポジウムが東久留米市で開かれた。約120人が集まり、各地の外来担当者や患者らの話に耳を傾けた。

横浜市の外來事務局を担当する溝口修さん(61)は「駅周辺の喫茶店など病院とは違う雰囲気です。外来を開き、病院では話せない患者さんの本音を引き出せているようだ。患者の皆さんの心に寄り添う手伝いをしていきたい」と話す。

乳がんを経験したフリーライター1の徳田祐子さん(64)は「医療の取材経験があり、詳しいつもりでいたが、自分のことになると気持ちが上ずって、十分な判断ができなかった。もし外来があれば、雑多で整理できない悩みを聞いてもらえたらと思う」と話した。NPO法人は、今年9月に

長野県佐久市に支部第1号が開設される見通し。樋野教授は「がん患者の多くは医療者と向き合う時間が限られ、医療のはざままで苦しんでいる。がん哲学外来は、患者主体の医療の入り口と考えている」。

■24日に大阪で医療フォーラム「がんを理解しよう」

患者の立場から開かれた医療を求めるNPO「ささえあい医療人権センターCOML」が24日午後2時から、大阪市のドーンセンター(中央区大手前1の3の49)で医療フォーラム「身近な病「がん」を理解しよう!」を開く。毎日新聞で「がんから死生をみつめる」を連載中の中川恵一・東京大付属病院准教授、緩和ケアの第一人者、武田文和・埼玉医科大学客員教授が、がんに関する正しい知識や対応方法について解説する。参加費は資料代など2000円。事前電話(06・6314・1655)かファクス(06・6314・3696)かメール(oml@coml.or.jp)で申し込み。

定期的に開かれている外来の問い合わせ先

- 横浜がん哲学外来事務局 (横浜市) mizo38@rose.ocn.ne.jp
- 東久留米がん哲学外来事務局 (東京都東久留米市) higashikurume.gg@gmail.com
- 柏がん哲学外来(がん患者・家族総合支援センター、千葉県柏市) ☎04・7137・0800
- 八戸がん哲学外来 (青森県八戸市) ☎0178・70・5510 (月、火、木のみ)